

最近の母親たちの傾向として、子どもに手がかからなくなると、パートタイマーとして働きに出たり、ボランティア活動に熱心になったり、あるいはテニス、ヨガと健康美作りにいそしんだりというふうに、「外」に出かける人々が多いという話を聞いた。

女性の自立が経済的に自分で給料をもらうこと、離婚、というふうにみられる風潮もあるようだ。しかし、裏と

て、母親として、女性としての生き方がただ、愛を与えればよいという抽象的なものではなく、人間としての成熟のためにもむしろ求められるのは「外」に出る時間ではなく一人の時間を作ることではな

ひとりの時

藤屋 紀子

いかと思う。

だれだって、独りぼっちという人間関係の切断された状態はきらいだ。しかし、時には自分から進んで一人で居る時間を作って、持って、孤独を恐れずに生きていくことを自覚するのでもいいのだ。

今、与えられている自分の生き方についてはっきりした見極めは、むしろ喜ばしい肯定であり、承認でもあり得る。私たちはたいにいいつちも、弱さに悩みつづけ、一日を精いっぱい生きている

から。

ふり返ってみて、まさにその弱さに悩み続けた人生を通して、最善のことがなされているような気がする。幼い頃に帰れるものなら、今すぐもう一度やり直したいと思ったことが何度もあった。過ぎ去

った日々は決してもどってこないけれど、その苦しみや悩みの中で、少しずつ、キリストの十字架の意味がわかりかけてきたのかもしれない。あのイエズスの血が今も私たちの生活の中に注ぎかけられている。その所へ私たちは招かれている。導かれている。

カナンの地において、神と共に生きるように、輝かしい生活をめざして歩む人間になるために、モーセのように神に出会い、神の言葉を聞きに荒野に入ろう。神殿の引き裂かれた幕の向こう側から、きょうも新しい太陽が昇ってくることを信じて。